



平成 25 年度 群馬大学教育学部 障害児教育専攻

推薦入試問題（小論文）

解答上の注意

- (1) 小論文の解答時間は 90 分です。
- (2) 問題は 2 つあります。両方に解答してください。
- (3) 解答用紙 2 枚それぞれに、受験番号を必ず記入してください。
- (4) 問題用紙、下書き用紙、受験票は各自持ち帰ってください。

問題 1

以下の文章を読んで、人間における自然と文化の関係についての筆者の考えを 400 字以内でまとめてください。

子どもは生まれてすぐに文化にさらされはじめるが、それでも最初の数年間、大きくはやはり「自然のうち」にいる。昔の人たちの言い草を借りれば、「七つまでは神のうち」。その「七つ」とは、数え年で七歳、ちょうど学校に上がる歳である。まだこの世に生まれて数年しかたっていない子どもたちは、それだけ人間の文化に染まっていない。「神のうち」というのは、文字通りには神様の領域、言い換えれば文化以前の「自然のうち」ということでもある。

言ってみれば当たり前のことなのだが、私たちはときどき、この「子どもの自然」を忘れてしまう。それだけ私たちおとなは文化にどっぷり浸かっている。しかし、この文化も、もともと自然のプロセスから離れて成り立ったものではない。文化はいわば自然の周囲をくるむようにして形成されてきた。

たとえば人も動物である以上、食べ物を食べなければならない。それは自然のプロセスである。しかしその食べ物の採取を自然にまかせるのではなく、農耕や牧畜として自分の側から計画的に生産する。それが文化である。あるいは口に食べ物を入れて咀嚼する食行動は自然そのものだが、人はそのレベルを超えて、いろいろな食べ物を集め、混ぜ合わせて調理し、食具を使って食事をする。人間社会では、食事の文化が自然の食行動をくるむようにして、多様に広がってきた。

育児もまた同じである。人間が人間になる前から、もちろん親は子を産み、育ててきた。その子育ての基本は自然に支えられたプロセスである。そしてこの自然のプロセスをくるむようにして育児の文化が多様に作られてきた。赤ちゃんに衣類を着せ、オムツをあてるのもそうだし、乳の出ない母には乳母が代わり、あるいは母乳にかわる代替物を考え、人工乳を開発するのもそうである。また抱っこやおんぶにしても、人間には自然のありようを超えた多様性がある。育児の自然を、育児の文化がくるんでいる。それが人間の育児である。

人間の生きるかたちは、二つのルートによって世代から世代へと継承される。一つは系統発生（いわゆる進化）の過程を通して、遺伝によって人間的形質を継承するという生物学的継承。端的に言えば、人間からは人間の赤ちゃんが生まれ、赤ちゃんはその遺伝子構造に組み込まれた自然のプロセスを通して育っていく。もう一つは、人間が歴史の過程をへて積み上げてきた文化的形成物を、子どもがその育ちの過程のなかで、親の世代から学び、引き継いでいく、いわゆる文化的継承である。

この二重の継承によって、文化が自然の周囲をくるむようにして広がり、歴史のなかで次々と新しいかたちを展開させては、それを蓄積、継承して、これが人間の文化を形成してきた。そのように見れば、自然と文化は順接でつながっている。いや、そもそも生物学的継承と文化的継承として、両者を区別しても、その境目は判然とせず、この二つは順接という以前に、相互に解きがたく編み合わされている。

しかし一方で、文化の展開していくその延長上を見ていけば、なかには逆接の継承と言わざるをえない場面を見ることがある。つまり文化が肥大した先で、自然をよりよく充足させるどころか、逆に自然とすれ違い、これを裏切る事態が生まれてくる。

人間は、自然が敷いた生命の道程に重ねて、ここ十万年の歴史のなかで、ことばを生み出し、道具の世界を広げてきた。おかげで人間のコミュニケーション世界はどんどん広がって、いまで

は地球規模の膨大な情報がインターネットを通じて世界中に流れるようになった。また、おそろしいほど多種多様な道具や機器がこの世界に送り出され、かつては考えられなかったほどの商品が身の回りに振り撒かれ、人々の欲望をかきたて、多くの人がこれにとりつかれて生きている。もはやこれを自然の直接の延長だとは言いがたい。それほどに自然と文化とがかけ離れている。そしてその懸隔のさまを仔細に見れば、あちこちに繕いきれないほころびが見えてくる。

一例をあげれば、かつて子育ては共同体のなかで担われ、赤ちゃんが新たにこの共同体のなかに生み出されたとき、誰もがこの赤ちゃんという自然と出会い、つきあう。そして育児の文化が、どの世代にも共有されていた。ついこのあいだまで赤ちゃんとして子育ての対象でしかなかった子どもも、数年たてば、自分より後に生まれてきた新たな赤ちゃんとの出会い、その自然とのつきあいを、おとなたちの所作から、見よう見まねで身につける。そして自分で自分の身の回りのことができるようになれば、小さな赤ちゃんを背負い、あやし、その身の回りの世話をするようになる。子どもたちは大きくはおとなたちによって守られながら、一方で自分より小さな子どもを守ってもいる。そうした＜守られながら守る＞過程を重ねて、その子どもが成長しておとなになり、自身が次の世代の子どもを産む世代になったときには、子育ての文化をしっかりと身に浸み込ませている。そうした育児文化が共同体のなかで引き継がれ、共有されてきたのである。

ところが、近代になって産業構造が大きく変化し、賃労働を軸に核家族化が進行することで、世代構成のかたちが大きく変化した。その結果、かつて育児の文化をごくふつうに身に浸み込ませていた育児の共同体が、私たちの周囲から徐々に失われてきた。現に、いまでは、結婚して自分の子どもが生まれるまで、赤ちゃんの世話をしたことがないという女性が少なくない。いや、生まれてはじめて抱いた赤ちゃんが自分の赤ちゃんだったという女性もいる。この女性たちは、赤ちゃんという自然とのつきあい方を知らないまま成人して、自らが赤ちゃんを産んだとき、不安のなかで育児をはじめざるをえない。そこでは文化と自然がうまく重なり合わない。子どもの虐待なども、大きく見れば、その結果の一つかもしれない。

生まれてくる赤ちゃんは、つねにまだ文化をまとっていない新鮮な自然である。子育てがこの新鮮な自然とのつきあいであることは、どの時代も変わらない。しかし、文化の側はつぎつぎとその姿を変え、最初は自然をくるむようにして生み出されていたはずの文化が、やがてその展開の果てに、くるんでいたはずの自然とすれ違う。文化が独自の論理で動きはじめたとき、その行き着くところは、かならずしも自然のまったき充足ではないのである。

出典 浜田寿美男（2009）『子ども学序説』、岩波書店。

（出題にあたり一部改変）

問題 2

以下の文章は、ある保育園でのエピソードです。小さな子どものおむつが濡れていることに、筆者は気づくことができなかつた一方で、男の子たちはそれに気づくことができたのはなぜでしょう。あなたの考えを 400 字以内で述べてください。

また、このエピソードを踏まえ、あなたが学校の教員となった場合、子どもたちへの教育において、何を大切にしていきたいかを 300 字以内で述べてください。

集団の中で人間として大事な心と力を子どもがいかに豊かに学ぶかについて、たまたま出会った感動的なシーンを紹介したいと思います。

もう十数年あまり前のこと、ある保育園の自由保育の部屋の片隅で、子どもたちを観察していたときのことで、私のすぐ傍で、四、五歳の男の子たち三、四人が棒を振り回してチャンバラ遊びをしていました。そこへよちよち歩きの子どもが近づいてきました。チャンバラ遊びがとても活発なので、その子がどうなるか、男の子たちはどうするかとはらはらしていました。ところが、男の子たちの遊びが、ぴたりと止まりました。そしてその中の一人が、さっと飛び出してきました。何が起きたのかみていると、その子は部屋の隅へ行き、棚からおむつをとり、やがて先生を連れて戻ってきたのです。

いったい、なぜそんなことが起こったのでしょうか。私は、よちよち歩きで近寄っていく子に男の子のチャンバラ遊びは危ないなど、ただ心配するばかりでした。ところが、その男の子には小さい子のおむつが濡れていることが、なぜかわかったのでしょう。表情からか歩き方が変わったのか、いずれにしろ、ものいわぬ幼い子どもの様子から、おむつが濡れたらしいとちゃんと見抜いたのです。そして、気持ち悪いだろう、取り替えてもらいたいだろうと思ったのでしょうか。しかし、自分はおむつを替えてやることはできないので、そこで自分ができる精一杯のこと—おむつをとって、先生を連れて来ることを、黙々とやってのけたのです。

その男の子も幼いときからその保育園で育っていました。ですから、自分も先生におむつを替えてもらって気持ちよくなった遠い思い出があるのでしょうか。一方、幼い子どもたちを日々みていて、子どもは何が好きで何を求めているのか、何をしてもらって満足しているのかななどを、自分のことのように知るようになったのでしょうか。

自分の心の働き—嬉しいこと、嫌なこと、気持ちのよいことなどを誰しも実感して知っています。これは動物でもすること、できることです。ところが人間だけは、それ以上のことを知るようになります。他人がどう感じているか、どのような気持ちでいるかなど、他者の心がわかるようになります。「心の理論」といわれます。人間の子どもは、かなり早くからこの力をもっています。いろいろな年齢の子どもがいる保育園では、先生から世話を受け、友だちから何かしてもらった嬉しい体験や、逆にけんかなど自分と他者との対立も経験します。こうした豊かな対人経験は、他者の心を敏感に察する力を育む場でもあります。そして他者の心に応えようとして、その人のために精一杯の力を出して援助する態度も育まれます。

すぐ傍にいながら、小さい子どもの不快な状態を察することのできなかつた私は、それだけにこの四、五歳の男の子のふるまいに感動を覚えたのです。親はみな子どもに対して「相手の気持ちを考えて」とか「人に親切に」などといいます。相手の身になったり、困っている人を助けるといったことが大事なことは、誰も異論はありません。けれども、そうした心や力を身につけ

せることは容易ではありません。口でやかましくいってもほとんど効果はありません。対人的な環境や対人的な体験が豊かな集団保育の場で、家庭ではなし得ない心と力を子どもが育んでいることを実感しました。子どもは集団の中で学ぶということを改めて体験的に気づかされました。

出典 柏木恵子（2008）『子どもが育つ条件』 岩波新書
（出題にあたり一部改変）